



はじめに

「誰でも調子に乗れる書道塾」がついに広島で開催。これはわたしの歴史の中でもかなり大きな出来事だ。こんなことがあるのだろうか。マガジンを書いていなければ起きなかったことだ。人生はこんな調子で、いろんなことが「うっかり」起こってしまうのだ、と思う。誰にでもあるたくさんの小さなチャンス、きっかけ、好機。これを活かしたり、逃したりして生きている。今回は本当に与えられたことをまっすぐ、ただただ受け取っていくという体験になった。そんなわけで今回の連載は「広島報告記」である。

わたしと広島と戦争

小学校1年生の夏休み、「はだしのゲン」をテレビで観る。従兄弟たちと訳もわからず一緒に観ていたわたしは途中からあまりにも苦しくなって泣き出す。「終戦記念日」の意味が理解で来たら、夏休みは毎回悲しい気分になる子どもになった。1歳、1980年にイランイラク戦争、11歳、1990年に湾岸戦争。世界が平和ではないことをテレビで知りながら、日本はどこか他人事で浮かれていたことを斜めから見ていた世代だった、と思う。とにかく「憂鬱なこども」だった。全世界の不幸を1人で背負っている気分にならなかつた。どうやったら世界がひとつになるんだろう。多くの情報に傷つきながら、この話を誰とも共有することもできず、この世界で生きていくことに必死だった。だから、「広島」という土地にはいつか行かなくてはならないような気がしていたが、全身で向き合ってしまうことも怖かったから、大人になるにつれて無意識のうちに避けていたような気がする。そんなときにやってきた、「広島の対人援助学会大会ですみあそびをしてもらえませんか」というメッセージに胸が高鳴った。

「書道対話」の意味

対人援助と書道を研究している、とはいってもわたしには何の肩書きもない。大学で研究しているのでもないし、発表のためにまとめているのでもない。対人援助学会のコンセプトでもある「研究だけに留まらない、実践だけに留まらない」というスタイルがとても好きで、まさにそれは「なんでもない人」こそその得意分野ではないか、と思っていた。そんな中で、「ただただ書道を通して人が自由になる場を開き続けて7年目」の中で得てきたものは多い。場作りのベースになっているのは、発達心理学、障害児教育学なので、インクルーシブな場を作ることや特性のある人はもちろん入りやすい仕組みである。それは「書道」という一見、枠組みのある世界とはかけ離れているようにも思う。制限がないわけではないが、そもそも「制限」とは何か。人間はその「自分自身」に湧き上がってくる感情を、さまざまな学習によって身につけた思考によっ

て、その場にふさわしいと「自分が」思っている行動を取っているだけである。実はとても主観的な世界をそれぞれが持っているにもかかわらず、大人になればなるほどそれを閉ざしてしまうように思う。「自由にどうぞ」という言葉に、「不自由な自分」を見つける。誰も制限していない世界に出た瞬間、どう振る舞っていいのかわからなくなることがある。どれほど人間は「自動化」された行動パターンを周囲の価値観から身につけてしまったのか。だからこそ静かな「あそび」が必要だ。人は多くの場合、自分の育ってきた環境の中で取り込んでしまった自動化システムが、時代によっては合わなかったり、誤作動したり、不本意な状況の中で手放していくようになってきている気がする。すみあそびに話が戻るが、大人になってから、本当の意味で「自由に遊ぶ」という体験を繰り返すことで、本当にしたかったことや、自分がどんな人間であったのか、など深い部分にも触れていくことができる。これは、簡単に言語化できるものではない。言葉にしようとしてもできないものがある。それでもなおわたしたちは、「伝えたい」と、もがく。そこに「表現」が生まれる。まさに「言語と非言語の間（あわい）」で遊んでいることそのものが、自己との対話、同じ場を共にした人との対話である。

広島という場で起きたこと

9日Spoon.Restaurant & Gallery、10日ハチドリ舎。出会った人たちの真っ直ぐさが響く。11日のオプションツアーのときに、被爆樹木と出会ってまた自分の中でも様々な変容が起きる。古い幹が、新しい幹に包み込まれるように命のバトンが渡されていく樹木を見た。大事なものを大事にしていきたい。そしてハチドリ舎の安彦さんとの出会いで「真面目なことを言っても引かれない場を作りたかった」という言葉に勇気づけられた。わたし自身ができることは何なのだろう、とも考えた。そして12日が対人援助学会大会ポスターセッション内での「書道対話」である。実際に体験していただくことで、短時間にも関わらずとても素敵な言語化をしてくださって、そのフィードバックそのものが嬉しかった。以下、体験していただいたみなさんの言葉をまとめた。

- 思った以上に、『うまくやる』ことに囚われている自分がいると感じました。
- 人それぞれの作品を見るのも面白く、個性を感じられたり、書道というツールを通して抵抗感低く自然な会話が成立しやすいなと感じた。
- 自由、気ままという感覚で楽しかった。
- 道具、場があるとアフォーダンスあり。場が動機形成していく実感。家族で共に何かの作業を通して対話したり楽しんだり。仕事でも子どもとの関係づくりなどにも活かせるように感じた。
- 描画は子どもと関わる時に使ったりもしますが、絵を描くことへの苦手意識がある子もいます。『すみ』という普段あまり触れない素材を使うことで、取り組みへのハードルが下がるように感じたので、ひとつの手立てとして加えたいと思いました。
- 言葉にできているものの外側に大事なことがあると思う。子どもたちとの表現活動をしているが、表現はしたいもの、しなければならないでもなく、せざるを得ない、「もよおすもの！」という感覚に近い。このときもどンドン書いた。あの楽しい、面白いという感覚を得られる場を作ってみたいなあ、と思う。

この旅路で出会った全ての方に感謝を込めて。またお会いできることを楽しみにしています。

櫻井育子（生涯発達支援塾TANE 代表）

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家、書道ファシリテーター、生涯発達コーディネーター。

「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつなぎめをコーディネート。

「つなぎめを学ぶ講座」、「旅する書道塾tane」も開催中。<http://ikuko-sakurai.com>